



えと文

嶋田喜一郎

感受性の忘失

規格化された感受性が、隙をみて、私を支配しようと襲いかかる。空虚な心にときおり充滿性を与え得る自覚の表象、たとえば、絵画の創作過程、において、感受性の作用は、不可欠である。しかも、その感受性こそ、他から押しつけられる規格化された感受性では、空虚な心を満たし得ないことが、明らかである。対象を見て、美しいと意識し、筆をとる。その自然な行為の内には、自己特有の感受性のみが、存在し得る。ここでは、規格化された感受性は、全く感受性の意義を持たない。煩雑な現在にあって、感受性の規格化が、一般的傾向である。自己が育み、自覚にまで成長させなければならぬ自己特有の感受性が、いま、忘れられようとしているのではないだろうか。

(大学職員)